

1. アンケート調査結果について

コーディネーター 西本美恵子

■シンポジウム要旨

時代の流れとともに、求められる医療も変化している。歯科医療においてもCureからCareへの変換と、活動の場が診療室だけでなく地域を含めた拡がりの必要性が言われるようになってきた。

今回のシンポジウムは、来るべき21世紀の小児歯科医療を模索し展望する企画をした。シンポジストを九州各地区で活躍されている4名の開業医の先生方をお願いした。先生方には、ご自分の医院が置かれている現状や地域的な特徴、診療や考え方、これからの展望などをお話していただく予定である。

これに先立ち、九州の小児歯科臨床の現状を把握する目的でアンケート調査を行ったので、その結果をコーディネーターから発表する。

■アンケート調査結果について

○調査対象および方法

アンケートの対象は本学会員で九州の開業医205名である。方法は自記式調査票（郵送法）を用い、78名（38%）から回答を得、集計を行った。

○結果

78名の歯科医師の開業形態は、小児歯科専門（小児歯科、或いは小児歯科と矯正歯科だけを標榜）が21名（27%）、残り57名（73%）は一般歯科も標榜していた。

診療の主体は全体の8割が治療、2割が予防であった。診療内容の変化については、全体の6割が変化があったと答え、特にう蝕治療の減少と予防処置の増加が多かった。来院者数については7割が減少、2割が変化なしと答えている。医院が抱える問題では、患者の減少、スタッフの問題、経営や保健制度の問題が多かった。しかし、そのような現状の中で、それぞれの医院が診療に対する自分の考えをもち、特徴ある診療をしていることもわかった。また、小児歯科専門群と一般歯科を含む群でほとんどの回答に違いがあった。

一方、これからの小児歯科医療の方向性についてホーム・デンティストとしてだけでなく、コミュニティ・デンティストとしての必要性をあげるものも多かった。また、健全な歯科医療を行うためには、歯科界だけでは限界があり、広く地域や行政などへ理解と協力を求めて医療環境を整えていく必要性を示唆する声も少なくなかった。